

不登校児をもつ家族の教育相談

2. エゴグラムからみた特徴

Educational Counseling for Families Concerning a Child's Non-Attendance at School

2. The Characteristics of Children and Families on the Egograms

(1990年4月9日受理)

平松 芳 樹 山 上 真由美

Yoshiki Hiramatsu Mayumi Yamagami

Key words: 不登校, エゴグラム, 自我状態

non-attendance at school, egograms, ego state

Abstract

Many kinds of psychological tests are used in educational counseling. The egogram is a good checklist that indicates one's ego state functionally. By the suggestion form of analysing the egograms some parents are able to look back at their attitudes on bringing-up the child and gain new insight into how to treat him. Moreover by re-checking at some intervals, we may concretely prove the growth of the parents.

In this study the egograms of several children involved in non-attendance at school nearly showed the characteristics of N-type (neurotic, psychosomatic disease type). If we aim at changing their ego state to be more autonomic and adaptable, it is necessary to raise the point of NP and to lower the point of AC. The egograms of parents showed the near characteristics of either M-type (good mother's type) or N-type. M-type, make NP and FC high, is the object for parents in order to gain emotional stability for themselves and to interact with their children more acceptably and warmly. We must advise them to reach certain aims case by case.

問 題

前報(平松・山上, 1989)では, 不登校状態で悩む家族の教育相談について, 2つの事例を通して検討した。不登校児をとりまく人間関係の改善が, 筆者ら相談員の果たす役割であり, 家族関係や学校関係などで不適応を起こしている子どもたちに自信を回復させ, 自律的行動がとれるように援助することが教育相談の意義であろうと考えた。

今報では不登校児の家族の教育相談の中で, エゴグラム・チェックリストを実施して, そこに見られる特徴を検討する。今回の目的は次の2点にある。まず, エゴグラムを通して自己理解を深めることで

あり、親にとっては養育態度を振り返る機会を提供できると考えられる。次に、ある期間を経過してエゴグラムパターンの変化が見られるのであり、教育相談の方向づけに示唆が得られることが期待されるのである。

エゴグラムを考案したのは、デュセイ (Dusey, J. M., 1977) であるが、その理論的基礎は彼の師であるエリック・バーン (Eric Berne) が創始した交流分析 (Transactional Analysis) にある。交流分析は、構造分析、交流パターン分析、ゲーム分析、脚本分析の4つの分析を行うのであるが、まず最初に自我の状態を分析することが必要であるとされ、これを構造分析と呼ぶのである。

人間には老若男女にかかわらず、親の心 (P)、おとな心 (A)、子ども心 (C) の3つの自我状態があり、これをチェックリストで数量的にとらえられるようにしている。親の心はさらにCPとNPの2面に分けられる。CPはcritical parentの略で、批判的な厳格な親の心、いわば父心といってよいものであり、NPはnurturing parentの略で、保護的で面倒見の良い親の心、いわば母心といえるものである。そして、子ども心にはFCとACの2面があり、FCはfree childの略で、自由な子ども心であり、ACはadapted childの略で順応した子ども心をあらわすものである。これら合計5つの自我状態をチェックリストで数量化して、それをグラフ化したものがエゴグラムである。

エゴグラムの見方は、まず、どの領域が高いかあるいは低いかを見て、その人の自我状態を知ることができる。そして、全体のバランスを見て総合的な判断がなされる。交流分析では、自分自身と他人に対する感じ方を「基本的構え」と呼び、成長の過程でまわりの人との交流の中で、それは肯定的になったり否定的なものになるとされる。杉田 (1985) によれば、基本的構えによるエゴグラムに4つのタイプを認めている。なお、交流分析用語で「OK」を使うが、これは愛されていて生きる価値があるという安心感や自分の能力に自信がある状態を「OKである」と表現し、愛されず安心できなくて自己実現していない状態を「OKでない」と表現するのである。4つのタイプは次の通りである。(1) 自他肯定型 (私も他人もOKである) では、NPが最も高く、CPとACが低いベル型になる。(2) 自他否定型 (私も他人もOKでない) では、NPが最も低く、CPとACが高いU字型になる。(3) 自己肯定・他者否定型 (私はOKだが他人はOKでない) では、CPとFCが高く、NPとACが低い逆N字型になる。(4) 自己否定・他者肯定型 (私はOKでなく他人はOKである) では、NPとACが高く、CPとFCが低いN字型になる。

さらに、デュセイは多くのエゴグラムの実例からいくつかのタイプを分類しているが、本報の家族に関係のあるタイプをとりあげると、W型とM型がある。W型はCP, A, ACの3つが高く、NPとFCが低いタイプで「自己破壊型」としている。M型はこの逆でCP, A, ACの3つが低く、NPとFCが高いタイプで「愛情型」としているが、ここでは「良い母親型」と呼ぶこととする。

また、今報ではN型を2つのタイプに分けて、FCが最も低いN型を「自己否定・他者肯定タイプ」とし、Aが最も低いN型を「ノイローゼ・心身症タイプ」とした。

方 法

(1) 対象と面接期間

K市相談室に不登校状態を主訴として来談した保護者および子どものうち4事例をとりあげた。筆者らは県教育委員会から相談員として委嘱されて、月に1回面接している相談員である。

ケースの概要は後述するが、各事例の面接期間は次の通りである。

事例A：1987年2月～1990年3月

事例B：1987年9月～1990年3月

事例C：1986年7月～1990年3月

事例D：1989年7月～1990年3月

(2) エゴグラム・チェックリスト

杉田(1985)のエゴグラム・チェックリストの成人用(表6, p.36-37)および中高生用(表7, p.38-39)を使用した。実施は1989年11月から1990年1月の間の面接日にそれぞれ個別に行なった。

事例とエゴグラム

4つの事例ごとに、登校拒否児およびその親のケースについて、概要とエゴグラムを順次紹介するが、事例Dは小学校1年生で、エゴグラムもとれていないので母親の方だけを掲載する。

(1) 登校拒否児の事例

〔事例A〕中学校3年女子(T子)

〈ケースの概要〉

家族は両親と本児と弟および祖父母の6人である。父は自宅とは別の市に店を経営し、母も手伝っている。小学校6年までは両親と弟の4人暮りであったが、現在の自宅の所在地である祖父母の住宅に移住し、それに伴い小学校も転校した。環境が変わり友だちもできないところへ、教育熱心な祖父母の学習への圧力などが加わってすっかり萎縮した状態となり、登校を拒否しはじめた。小学校6年の3学期はほとんど欠席のまま卒業して中学校に入学したが、1週間ほど通学しただけでその後は不登校状態になった。中学校2年も不登校状態は続いたが、8月からは週に2～3日K市相談室に通い始めた。週2日は自宅でピアノを習ったり、家庭教師について英語と数学を学習している。中学校3年になってもその状態は変わらないが、相談室での活動は積極的になり来室が楽しみのようなのである。ピアノをもっと練習したいということで、市内の音楽教室へもレッスンを受けに行きだした。この頃に定時制高校への進学が話題となる。12月にはピアノの発表会があり、観客の前で演奏した。3月には中学校の卒業式があり、相談室に通った日数も勘案されて卒業が認定された。高校進学のため願書を提出した。

T子に初めて面接をしたのは中学校2年の夏であったが、その時は表情も固く、質問に対する答えも母親を仲介するようであり声も小さかった。面接は月に1回のペースで行なったが、母親面接が主であり、2回に1回の割合でT子も交えて話す時間を持った。何回か会ううちにしだいによく話すようになり、笑顔もでて落ち着いてきた。口数は少なくおとなしい感じだが、家では弟(小学校2年生)には「お姉ちゃんは怒ると怖い」といわせる面もある。相談室でも最年長ということもあって、他児からたよりにされている。手先が器用でアニメの絵や手工芸も得意である。海外のペンフレンドと文通したり、お茶やお花の習い事をするし、ピアノ練習にも熱意を示すなど地道な努力を続け、生き生きとしてきた。さらに、中学校の教諭から見るととても無理だ、といわれていた定時制高校の入試もみごと合格することで進学への意欲も証明した。将来は短大にも進学したいと希望を述べている。

《エゴグラム》

中学3年の11月にチェックしたものである。図1のようにM型に近いものである。この頃には定時制高校への進学希望を固め、相談室のスタッフに勉強を教えて欲しいと申し出るなど意欲的になっている時期のものである。1～2年前のエゴグラムはチェックしていないので比較できないが、本児の言動や母親の話から推測して描いてみれば、現在よりFCが低くACが高い「ノイローゼ・心身症型」のN型であったと考えられる。いわば本児の成長とともにエゴグラムパターンがM型に変化してきたと考えられる。

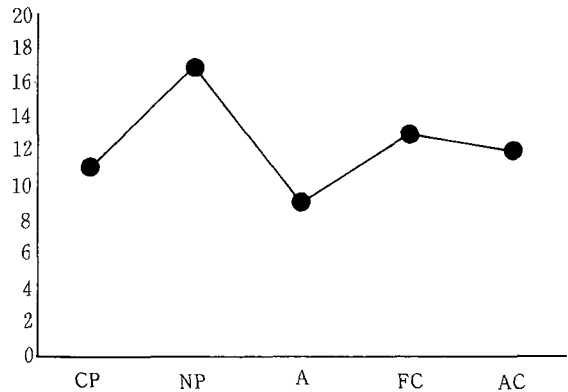


図1 事例A（中学3年女子）のエゴグラム

〔事例B〕中学2年女子（M子）

《ケースの概要》

家族構成は両親と4歳年下の妹の4人家族である。父母共に勤めに出ている。M子は小学校6年の2学期から登校を拒否しはじめた。直接のきっかけは夏休みの宿題が完全にはできなかったことと、運動会の練習やプールの水泳など不得意な体育を苦にして休み始めた。修学旅行には行ったがそれ以後は不登校状態を続けた。当時小学校2年の妹もM子を見習うように不登校状態となった。

面接は月に1回のペースで行ない、1990年3月までに23回の面接をした。母親とは毎回面接したが、それに3～4回に1回の割合で父親も加わった。M子と妹も来談初期の9回目までは一緒に加わっていたが、その後は相談室の別室で他児と交流していることが多くなった。時々姉妹のいる部屋に行って話をする時間は持つようにした。小学校6年の3学期からK市相談室に通ってくるようになった。最初の1ヵ月は週2回であったが、2ヵ月目からは週4日に増えた。中学校は入学式だけ出席して以後は不登校状態を続けている。筆者がM子と妹に最初に面会したときは、姉妹とも視線を伏せ身を縮めほとんど会話もできない状態であった。しかし、相談室に通うようになってからはしだいに行動にも活気が見られはじめた。日常生活リズムも良くなり、絵や手工芸品の創作にも意欲を見せるようになった。中学校2年の学齢になっても不登校状態は変わらないが、相談室には月曜から土曜までの毎日通ってきている。筆者とも冗談を交えながら会話もできるようになっているが、まだ自己表現力は弱く、妹や家族に対しても自分を抑える傾向がみうけられる。

《エゴグラム》

図2はM子の1989年11月にチェックしたエゴグラムである。ACが最も高くAが低いところから「ノイローゼ・心身症タイプ」のN型に近い。情緒的に不安定で感情的反応を起こしやすい

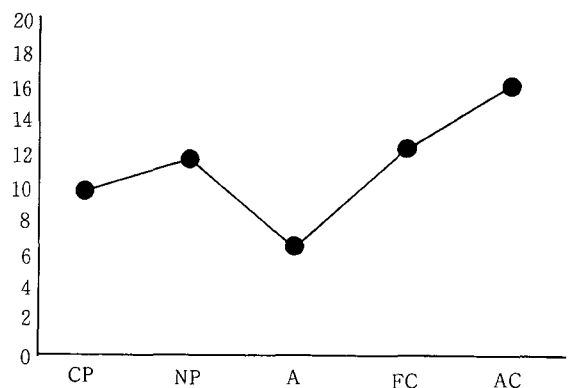


図2 事例B（中学2年女子）のエゴグラム

い。現実を冷静にとらえにくく、他人の意見に引きずられがちである。事例AのT子と比べACがかなり高くNPが低い。自己抑制、自己否定の傾向を軽減することによりM型に移行することが期待される。

〔事例C〕中学校3年女子（K子）

《ケースの概要》

家族は両親とK子、弟の4人である。父親は遠距離運送業でなかなか休みがとれない。母親も自営業をしていて忙しい。母親によるとK子は小さいときから育てにくい子供で、よく泣き、人見知りも激しかった。K子が2歳のとき母親が自宅で自営業を始める。K子は忙しい母親に代わり弟の世話をよくした。小学校時代はおとなしい子で困ることはなかったという。K子が小学校6年のとき、弟（小学校3年）が3学期に約2ヵ月登校拒否をしている。

K子は中学1年の5月より登校前に腹痛を訴え休みがちになる。6月末からまったく登校せず外出もほとんどしない。学校のことに触れると胃けいれんをおこす。もともと友達つきあいの苦手な方だが、中学になって友達との間でうまくいかなかったことをいつまでも気にする。休み出してから弟をいじめようになった。父親を避けているとのこと。

面接は月1回のペースで行なった。当初は両親が来談し、以後は主に母親面接がなされたが、ときにK子がついて来て合同面接となることもあった。K子はカウンセラーの問い掛けに緊張した様子で答え、自分の興味のある事柄は饒舌なほど話す、全体には沈黙しがちで照れ臭そうに下を向くことが多く、対人接触がなめらかでない印象を受けた。

母親によるとK子は1年の終わり頃には弟をいじめなくなり、自分から父親に接近するようになった。また、自ら進んで通信ゼミを始めたり、お菓子作りをするなど変化が出てくる。しかし、友達に遊びに来るよう誘われて応じたのに結局行けず、断りの電話も入れられずに落ち込むなど、対人関係の困難さは変わらない。2年になるとピアノを買ってくれるよう母親に強く要求してピアノを始めたり、習字を習いに行ったり、動きがみられた。3年になるとピアノの発表会に出るという大きな課題をこなした。また、面接の中で「小さいときからまわりの力に押されて萎縮していた。自分の言いたいことが言えなかった」と自らの内界を言語化するようになり、さらに、現実場面でもイヤなことはイヤと言えるようになった。以前は下痢、腹痛が激しかったが、3年の終わり頃には体調もよくなり、外出することが増えた。特に、K子が計画して家族旅行をするなど家族がまとまる機会がもてたのは大きな変化である。

中学卒業後は通信制高校に進学するつもりであるという。初めの頃よりも活動性が出てきたが、「仮面をかぶって本心を隠して努力するしかない」と述べるなど、無理な自己抑制の傾向や情緒的な不安定感に残っており、複雑な人間関係をこなしていく力はまだ不十分であると感じられる。

《エゴグラム》

中学3年の秋にとったデータである。さほど極端ではないが、NPとACが高くFCが低いことから「自己否定・他者肯定」のN型に近い

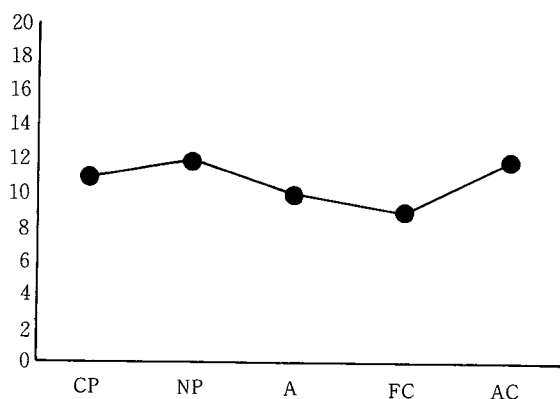


図3 事例C（中学3年女子）のエゴグラム

といえる。他人の思惑に敏感で、自分を押しさえてでもまわりにあわせようとする。《ケースの概要》に示した対人関係の困難さやK子の内省の言葉がこの結果を裏付けているといえよう。こうした無理が不適応を引き起こしていると考えられる。

(2) 登校拒否児の親の事例

〔事例A〕事例Aの母親

《ケースの概要》

事例A（T子）の概要で述べた通り、T子の母親にとっては夫の両親との同居のため移住して家庭環境の急変があり、嫁の立場の役割も増え気兼ねして、それまでの養育態度を一変させ、夫の両親のもつ「勉強のできる良い子」の価値観をT子に押しつけるようになった。しかし、初回面接でT子への親としての接し方に問題のあったことに気づき、受容的姿勢に切り換える努力をはじめた。その後T子への理解がすすみ、母親が祖父母のT子への圧力の防波堤になり、良好な母子関係を取りもどした。さらに嫁の立場から舅、姑との家族関係の葛藤が表明された。やがて否定的にとらえられていた同居が肯定的にとらえられるようになり、同時に祖父母もT子への理解を示し許容的となった。その結果、祖父母も自分たちの得意な美術工芸や生け花などを通じて孫との良好な交流がもてるようになった。

《エゴグラム》

図4にこの母親のエゴグラムを示す。1989年12月のものを「現在」とし、T子が登校拒否を始めた頃の自分を振り返ってチェックしたものを「以前」としてこれらを重ねて作図した。どちらもM型に近いが、以前に比べて現在の方がより高い位置になっている。以前のものは前述の事情もあり、ややもすればN型になったり、一貫性を欠く時期もあったと考えられる。その後、母親自身の成長があり、ACをのぞく各領域が高くなり「良い母親」のM型がはっきりしてきたといえる。

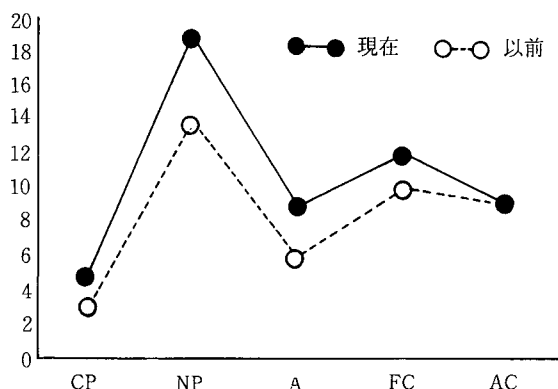


図4 事例Aの母親のエゴグラム

〔事例B〕事例Bの母親

〔事例B〕事例Bの父親

《ケースの概要》

家族構成などは事例Bの概要で述べた通り4人家族であるが、自宅はK市の郊外の一戸建て住宅で、まわりの家から少し離れている。したがって近隣との交際もあまりなく、M子たち姉妹も近所に遊び友達がいなかった環境である。母親はどちらかと言えば放任型に感じられた。たとえば子どもたちが不登校状態になった頃、両親が勤めに出ているので、姉妹が二人だけで終日自宅にいることになるのであるが、「何かして遊んでいるのでしょうか」と淡泊な様子であったことや、東山（1984）の母親ノート法による親子の会話のチェックを次回面接までの課題としたが、ほとんど実行できなかったことなどからうかがえる。その後ノート法を実行して、簡単な指示命令のことばの他はほとんど承認のことばをかけていなかったことに気づき、反省して努力したいということであった。しかし子どもと一緒に遊ぶことは苦手

のほうであるという。

父親の方は似た者夫婦という印象でやや放任的だが、母親よりは面倒見が良いようである。会社の休日には姉妹を野外に連れだしたり、家でも一緒にゲームを楽しむことがある。しかし、M子が体育を苦にしているように、父親もスポーツに苦手意識があるという。

両親とも体面を気にする方であり、この点は子どもたちに似たところがあるという。さらに負けず嫌いのところも共通しているということであった。以前母親は自分の学校時代の成績通知表を「オール5だった」と見せたり、父親も勉強は良くできていたのだと話して、学習への圧力をかけていたようである。相談過程の中で、このような養育態度を振り返り、「格好の良くない自分を人に見られたくない」とか、「完全でなければ登校できない」という子どもの状態を形成したのであろうとの親の洞察が得られた。そこで、カウンセラーは子どもたちの完全主義をくだき、自信を持たせるための方法をいくつか助言した。少しでも意欲的な行動が見られたならタイミングよく大いに承認のこぼかけるとか、知的好奇心や社会的関心を示した場合には、できるだけ協力して援助できる態勢を常に作っておくことなどを助言した。毎回の面接の中で具体例で助言したが「そうやってやればよかったですね」というように、承認や支持を与える機会を見逃していることが多かった。「どうもほめてやるのが下手で、注文ばかりが多いようです」と反省しながら考えて行動するようになった。こうした努力があって、子どもたちの家庭での行動に変化がみられ、家事の分担をして手伝ったり、乱れていた生活リズムが整ってきたということである。

《エゴグラム》

〔事例B〕母親のエゴグラムを「現在の自分」と「以前の自分を振り返ったもの」でチェックして、2つを重ねて作図した。(図5)

以前はNPとFCの極端に低いW型であった。W型はデュセイによれば「自己破壊的」なタイプとされているが、このエゴグラムはCPとAがそれ程高くないので典型タイプとは異なると考えられる。しかしNPが低いのは、減点主義で子どもの気持ちや感情を汲み取ることが少ない淡白なところがあることを示し、FCが低いのは、言いたいことも言えなかったり、自分の感情を自由に表現できない状態を表わしている。現在のパターンはAとFCの位置は変わらないが、CPとACが少し下がり、NPが大きく上昇してN型（自己否定・他者肯定型）になった。子どもの感情や気持ちを受け入れる努力をして面倒見のよさが増え母性性が発揮されてきていることが分かる。今後はさらに自分の感情表現を自由にできるようにし、ユーモアのある会話が楽しめるように、すなわちFCを高

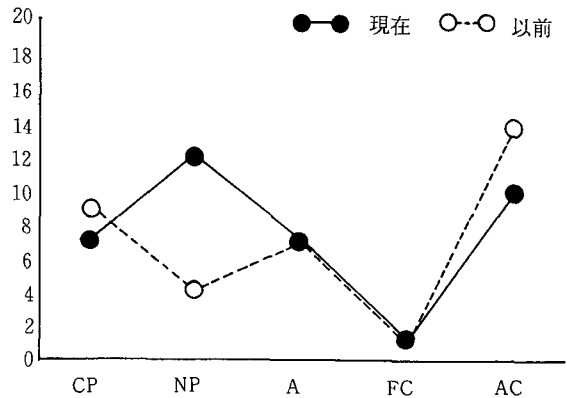


図5 事例Bの母親のエゴグラム

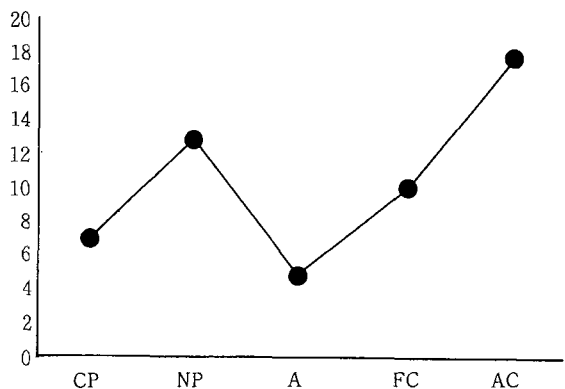


図6 事例Bの父親のエゴグラム

くする努力をすれば、M型に近づくと考えられる。

〔事例B〕 父親のエゴグラムは図6の通りで「ノイローゼ・心身症型」のN型である。母親の現在のパターンと似ているが、FCとACが高いN型である。最も強いのがACであり、人の言うことを気にして自分が出せない、順応した子どもの自我状態が基調となっていることを示している。このエゴグラムをもとに父親と面接をしたが、自分の性格を「厳しさが出せない」「堅苦しい枠からはみ出せないでいる」ところが問題であろうと洞察していた。そして、子どもたちに対しても、ただすなおで良い子であることだけを望んでいたことを反省している。

〔事例C〕 事例Cの母親

〈ケースの概要〉

子供の状態、家族構成、面接の進み方はすでに述べたとおりである。

当初母親は、弟が登校拒否をしたとき弟にのみ注目してK子を放っておいたことを反省するが、登校しないK子を憎む気持ちもあると述べる。父親に対してももう少し子供とかかわってくれたらと批判的であった。面接の中で、これまで忙しさにかまけてK子の言うことをはねつけてきた、もっとゆっくりかかわってやればと気付くが、どうしても仕事を優先してしまうと述べる。K子が2年になり不登校状態が長引くにつれて母親は強いあせりを示す。また、母親の愛情を試すようなK子の言動に対処しきれず動揺するが、次第にK子の気持ちがわかりK子にまかせられるようになった。これまでK子に期待して期待どおりに動かないK子を責めていた気持ちに気付くが、ありのままのK子を受け入れられない。3年になりK子の生活は変わらないが、母親自身が以前よりも精神的に楽になり、学校のことも開き直って考えられるようになったという。しかし、進学など現実の問題に直面するとK子が決断するまで待てなくなりイライラしてしまうとのこと。

〈エゴグラム〉

母親のデータもK子が3年の秋に実施したものである。Aの得点が極端に低く、感情的な行動をしやすい傾向がうかがえる。NPが一番高いことは母性性のサインである。面接初期のデータがないので比較できないが、当初K子とのかかわりのうすかった母親が面接過程にみられるような母性性の変化を遂げたことをNPが表していると推測できる。しかし、同時にCPも高く、これがFCと結びついて子供への非難、

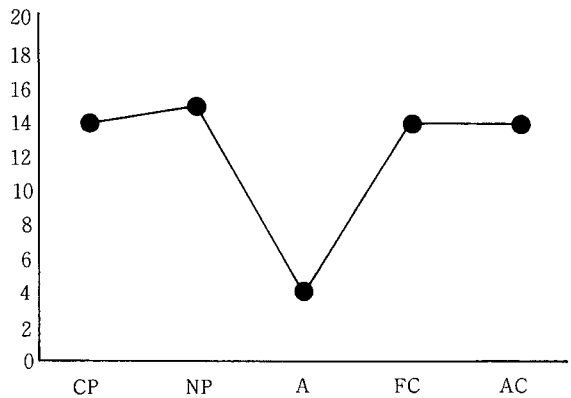


図7 事例Cの母親のエゴグラム

攻撃がおこっているのかもしれない。また、ACが高く、まわりを気にして子供へのかかわりも抑制されているようである。母親自身が情緒的に不安定になりやすく、それがK子の心理状態や対人態度に影響していると考えられる。

〔事例D〕 小学校1年男子の母親

〈ケースの概要〉

家族は両親と兄、本児の4人。父親は会社員。母親はパートに出ている。

本児は保育園、幼稚園のときも行きたがらないことがあった。小学校に入学してから週に1度は休み6月になると朝の準備に時間がかかり学校に行っても教室に入らなくなった。その直後からまったくの不登校状態になる。

面接は月に1回のペースで母親面接を行なった。母親ははじめ本児をなんとかして学校に行かせようとし、宿題や生活記録のことも厳しく言っていたが、面接の中で無理強いしたり怒ったりするのはよくないと気付き、かかわりを変えていった。すると、本児も母親に甘え、よくしゃべるようになった。また、口うるさい父親を批判していたが、父親とも協力して家庭環境をよくしていこうとしている。

《エゴグラム》

5回目の面接時に施行したものである。全体に得点が少なくエネルギー水準の低さがうかがえる。各項目において大きな得点差はないが、「良い母親のタイプ」のM型に近い。3つの自我状態の中ではPが優勢であり、CPとNPが同得点となっている。養育的な母性性と同時に、あやまちを許せない厳格さがみられる。これらの点はケースの概要で述べた母親の特徴と一致している。初めの頃のデータがないので比較できないが、面接過程における気付きや意識的な努力から推測すると、母性性が前面に出てきてNPが上がってきたのかもしれない。

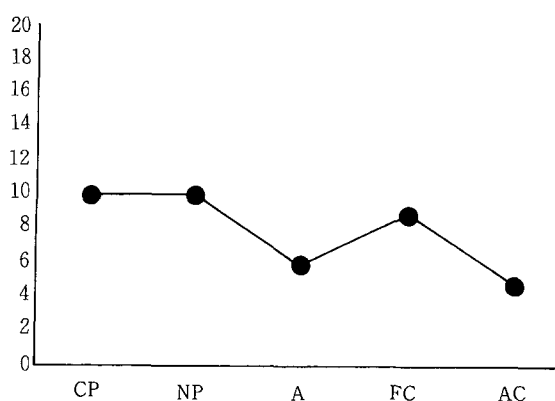


図8 事例Dの母親のエゴグラム

考 察

不登校児及び母親のエゴグラムにおいてそれぞれ比較的共通する傾向がみられたのでまとめ、考察を加えたい。

(1) 不登校児のエゴグラム

不登校児のエゴグラムはN型とM型に近いものがあつた。

事例Bが「ノイローゼ・心身症」のN型に、事例Cが「自己否定・他者肯定」のN型に近かつた。これらはいわゆる良い子で、親や先生の言うことをよく聞き、自分の欲求や感情を押さえてでもまわりの期待に沿おうとする。依存的であり、自律性に欠ける。内側に無力感、劣等感を強く秘めており、現実を冷静にとらえられない面もあつて、情緒的に不安定になりやすい。これらは《ケースの概要》からも裏付けられており、こうした傾向が学校での適応をむずかしくし、不登校状態を引き起こし、さらに長引かせているものと考えられる。

また、事例AのエゴグラムはM型に近いものであつた。ここからは思いやりの気持ちが強く、他人のことを優先しやすいことと、物事を客観的に見えず早合点しやすい傾向がうかがえた。NPが高くAが低い点はN型と同様であるが、ACがさほど高くなっていない点でN型のような不適応状態がみられないといえる。この結果がこのケースのもともとの傾向なのか、あるいは教育相談によって変化したもの

なのか、面接の初期のデータがないので比較検討できないが、《ケースの概要》の経緯からみて後者ではないかと推測される。つまり、不登校の初期の段階ではN型であり、不適応状態にあったのが、教育相談を通して自律性が高まった結果、ACが低くなりM型に変わってきたものと考えられる。

(2) 不登校児の親のエゴグラム

不登校児の親のエゴグラムにおいてもM型に近いものとN型に近いものの2つがみられた。

事例A'と事例C'及び事例D'は「良い母親」のM型に近く、子供をあたたく受けとめていく母性性を持ち、自由な感情表現もできるので子供とのよい関係を作りうるといえる。が、特に事例C'、事例D'においては、厳格で融通のきかない面や冷静さを欠いて感情的になってしまう面があり、それが子供への批判や攻撃となりやすく母子関係を阻害しているように感じられる。

事例B'は「自己否定・他者肯定」のN型に、事例B''は「ノイローゼ・心身症」のN型に近い。このことは、両親ともに内的不安定感をもっており、自分を押しさえてでも他人によく思われたいという無理な対人パターンを取っていることを示すものである。したがって、子供との安定した関係をもちにくく、その結果として、子供が不登校という不適応状態を引き起こしていると考えられる。

また、親子でエゴグラムを比較してみると、事例Aとその母親の事例A'、事例Bとその父親の事例B''とはエゴグラムの型がたいへん似ている。親は子供にとって一番身近な存在であり、親の子供に与える影響力ははかりしれない。子供はあたかも親のコピーであるかのように親の自我状態と同一化し、その対人パターンも取り入れていく。子供の不適応の背景には、親の問題を含めて家族のひずみが何らかの形で存在していることがエゴグラムからも指摘された。

(3) エゴグラムと教育相談

事例A'と事例B'については以前の自分と現在の自分の2つのエゴグラムが得られており、自我状態の変化がみられる。いずれもNPが高くなっており、教育相談を通して母親自身が洞察を得、子供とのかわりにおいて母性性を発揮できるようになったことを示すものであり、教育相談の成果であるといえよう。他の母親の事例についても数カ月から2年にわたる教育相談を受けてきており、ここであげたエゴグラムは教育相談によって変化した側面を含みうるということをつけ加えておきたい。

最後に、教育相談におけるアプローチをエゴグラムの観点からみると、まず、不登校児には「自他肯定型」(NPが高くACが低い山型)になることを目指し、現実を冷静に受けとめるとともにのびのびと自己表現でき、他人とのあたたくい交流がもてるよう援助することであると考える。また、不登校児の母親に対しては、いわゆる「良い母親のタイプ」(NPとFCの高いM型)になることを目指し、母親自身が精神的に安定し、子供の気持ちをあたたく受けとめ、子供にゆとりをもったかわりができるよう援助していくことであろう。

エゴグラムを通して教育相談のひとつの指針が得られることが、この研究で確認できた。

要 約

教育相談において、各種の心理テストが実施されている。エゴグラムはその人の自我状態を機能的にとらえる、すぐれたチェックリストであると考えられる。教育相談の中で、親のエゴグラムを分析しな

がら助言をすることにより、親自身が養育態度を振り返り、子どもへの接し方の洞察を得ることも可能であった。また、一定期間を置いてエゴグラムをチェックすることにより、親の成長を具体的に実証できる資料となりうると考えられる。

今報の数人の不登校児のエゴグラムの特徴は、N型（ノイローゼ、心身症型）に近いものであった。自律的で適応的な自我状態に変化することを目標とすれば、NPを高くし、ACを低くすることが当面の課題となるであろう。親のエゴグラムでは、M型（良い母親の型）に近いものと、N型に近いものがあった。親自身が精神的に安定し、子どもに受容的であたたかい交流がもてるようになるには、（NPとFCを高くして）M型を目標とすることであり、それぞれのケースに応じてその目標に近づけるよう助言することが必要である。

文 献

- 1) 池見西次郎（監）杉田峰康 1973 交流分析と心身症—臨床家のための精神分析的療法— 医歯薬出版
- 2) 杉田峰康 1983 こじれる人間関係—ドラマ的交流の分析— 創元社
- 3) 杉田峰康 1985 講座サイコセラピー 8 交流分析 日本文化科学社
- 4) ジョン・M・デュセイ 新里里春（訳） 1980 エゴグラム—ひと目でわかる性格の自己診断 創元社
- 5) 東山紘久 1984 母親と教師がなおす登校拒否—母親ノート法のすすめ— 創元社

〈付記〉

本稿の事例の一部は、岡山心理学会第37回大会（1989年12月：岡山大学）で口頭発表した。

事例のうちAとBは平松が、CとDは山上がそれぞれ担当したものである。